

専修学校職業実践専門課程（介護分野）

第三者評価試行

第三者評価報告書

東京 YMCA 医療福祉専門学校

平成 28 年 2 月 8 日

目次

1. 各基準の評価結果

- 基準1 教育理念
- 基準2 学校運営
- 基準3 介護福祉士の職業能力の発揮・伸長（教育の質保証・向上・学修成果）
- 基準4 介護福祉士として特に求められている認知症の種別・特性等に応じたスキル教育
- 基準5 介護福祉士養成校の教員の資質向上
- 基準6 介護福祉士の生きがい・やりがい・キャリア形成等を醸成する教育
- 基準7 介護福祉士の実習における実習先との連携
- 基準8 介護福祉士の専門的力量的向上
- 基準9 学生の募集と受け入れ
- 基準10 内部質保証

2. 異議申立ておよびその対応

※

基準3 介護福祉士の職業能力発揮・伸長（教育の質保証・向上・学修成果）

総評

卒業時到達すべき目標（厚生労働省で示す資格取得時の目標 11 項目）や学校としての卒業時の人材をわかりやすく学生に示している。その方法も常に目に入るように教室に掲示していたり、また到達度を学習支援演習（ホームルームのような授業）などを設け個別対応も行っている。卒業時目標に対して2年間の学習マップが細かく体系化されている。科目間の連携も取れている。学生からも、教員同士の連携ができているという言葉が聞かれた。卒業時共通試験合格率は、100%とはいかないが、一年度であれば、64人中不合格者が6名であり、合格率は90%を超えている。また社会性という面では、全ての学生が外部訪問者に対して挨拶が徹底していた。

学校として目指すべきゴールの中に、「ゴールは就職すること、学校は現場で活躍するための学び・準備の期間」とあり、資格を取ることだけが目標ではないことも明確にしている。卒業と同時に全員が、職能団体である「介護福祉士会」に入会するしくみを取っている。現在「介護福祉士会」入会率5%で弱他の専門職と比べてかなり低いなか、学校の100%の入会率はすばらしい。実際に卒業生の若手が「介護福祉士会」で、介護のやりがいや魅力を広めるために積極的に活動している。これらは、卒業後、現場で活躍できる人材育成に努めている成果であると考えられる。

必須3-①	養成校の卒業時到達目標に沿った知識・技術の習得ができ、学習成果を確認できる体制をどの様に作っていますか。
評定	3
<p>評価する点</p> <p>卒業時到達すべき目標（厚生労働省で示す資格取得時の目標 11 項目）を学生に配布するだけでなく、常に目に入るように教室に掲示している。また学校として、学生が目指すべきゴールを①全てはプロの介護福祉士になるための学び②ゴールは就職すること③学校は現場で活躍するための学び・準備の期間④社会人としてのマナーを身につけるなど、しっかり学生に示している。</p> <p>それらをどのように身につけていくのか、2年間の学習マップが細かく体系化されている。養成校卒業時に知識の到達度を確認するため行なわれる卒業時共通試験の結果を、毎年データとして客観的に分析されている。</p>	
<p>特に優れた点</p> <p>評価する点と重なるが、卒業時到達すべき人材像をしっかりと掲げ、教員及び職員も含む連携ができている。又、学生への周知も言葉や配布物だけでなく、日項目につく教室に掲示するなど工夫されている。</p> <p>学生の面談からも、突然の訪問にもかかわらず、こころよく受け答えしていたこと、ま</p>	

たその答え方やその内容からも、学校が目指すべき目標は学生に周知されていると伺えた。

さらに、学習支援演習（ホームルームのような授業）などを設け、到達目標に対して、個別的に確認を行っている。

更なる向上を期待する点（改善を要する点も含めて）

学校側でもあげていた教員へのコマ数や負担感への対策が、今後の課題ではないかと考える。

必須 3-⑤	医療的ケアに関する専門的知識・技術を習得させるために、どのような授業を展開させていますか。
評定	2
評価する点	
効率よく演習が進むように、演習の組み立て方を工夫している。①グループ4～5名の学生に1名の教員を配置し（すべて「医療的ケア教員研修修了者」である専任教員と非常勤講師）短期間で多くの学生が集中的に演習することができる体制を整えている。演習用アシスタント配置表、演習方法、日程、流れがわかるように表が作成されている。1年生の講義の部分の授業は見学することができた。専任教員の他にアシスタント2名（看護師）で、「感染予防演習」を行っていた。グループにわかれて、医療的ケアの演習に入る前に、しっかりと清潔・不潔の概念が身につけられるような授業を展開していた。	
特に優れた点	
日程表がしっかり組まれている。介護学生は、清潔・不潔の概念の理解が難しい傾向にあり、それに対して『感染予防演習』という授業をしっかりと取り入れ、又その方法も、座学のみで伝えるのではなく、摂氏やシャーレなど使用して、一人ひとりが演習していく形で実施するなど工夫されていた。また演習においては授業終了後、毎回、質疑応答の時間を設けているところがすぐれていた。	
更なる向上を期待する点（改善を要する点も含めて）	
まだ、どの学校も基本演習修了生を卒業させていない状況である。実際「医療的ケア」を学んだ学生は何が身についたのか、介護福祉士が行う「医療的ケア」をどう考えたのかを確認していく必要がある。また養成施設で学んだ学生が行う「医療的ケア」の到達すべき目標を他の養成校や実践現場と連携しながら明確にしていく必要もあるのではないと思われる。	
医療的ケア担当教員から、直接話を聞くチャンスがなかったのが残念、シラバスの内容も提示されていたが、そこまで、チェックできなかった。学生からの『医療的ケア』に関する声も聞けると良かった。	

必須 3-⑥	介護福祉士の職業能力発揮・伸長のために特色ある独自の取り組みとしてどのような事を行ってなっていますか。
評定	3
<p>評価する点</p> <p>学校として目指すべきゴールの中に、「ゴールは就職すること、学校は現場で活躍するための学び・準備の期間」とあり、資格を取ることだけが目標ではないとしている。卒業後現場に出て活躍できる人材を育成していくことを目指している。そのために職能団体である「介護福祉士会入会」に全員が卒業と同時に入会するしくみを取っている。現在「介護福祉士会」入会率5%程度と他の専門職と比べてかなり低い中、当校の100%の入会率はすばらしい。</p> <p>年に1度卒業生を対象にホームカミングディを開催し、卒業して現場で働いている中、仕事の悩みや不安を参加者と教員で共有できる場がある。参加した卒業生のアンケートから、情報交換ができ、今まで持っていた不安が解消できたり、モチベーションが上がったなどの声が記載されていた。</p>	
<p>特に優れた点</p> <p>「東京介護福祉士会」に入会するだけでなく、2015年にキックオフされた「若手介護福祉士の会」のメンバーとして、卒業生が活躍されている。その中で職業能力をどう発揮させていくのか、どう介護の魅力を伝えていくのかを試行錯誤している。またイベントなどを企画している。それらは、卒業後現場で活躍できる人材につながっている。</p>	
<p>更なる向上を期待する点（改善を要する点も含めて）</p> <p>特になし</p>	

基準4 介護福祉士として特に求められている認知症の種別・特性等に応じたスキル教育

<p>総評</p> <p>身体介護と認知症をもった人、身体介護は必要ないが認知症のある人、認知症が軽度の人、中重度の人など、さまざまな心身状況や生活環境の人がいることから、認知症の原因疾患別の症状とその進行、対応方法などにとどまらず、「認知症はあるが尊厳を持った一人の人として、その人らしい生活をどう再構築していくか」という視点で、多面的な教育を行っている。</p> <p>「認知症の理解」は講義形式の科目ではあるが、他科目同様グループワークを積極的に取り入れ、事例に登場する利用者の生活全体像の中で「その人らしさ」「適切なかかわり方や介護方法」を検討させるなど、工夫が凝らされている。</p> <p>さらに、「認知症の理解」を独立した科目とせずに、「こころとからだのしくみ」「障害の理解」では多様な知識と、「生活支援技術」では実際の介護場面での応用を、それらの根拠となる「介護過程」では、必要な介護の根拠とその方法を言語化するという流れの一</p>
--

部と位置づけている。各科目担当の教員との進度の調整や学生の理解度などは学科会議等で共有され、理解が不十分な学生には複数科目で同じ方針に基づいた接し方や教育支援が行われるなど、教員側の労力や熱意、それらの連携が強力に進められていることがわかった。

必須4-1	認知症の基礎的・基本的知識を習得させるために、どのような教育を行っていますか。
評定	2

評価する点

認知症の基礎的・基本的知識の修得は『認知症の理解』を中心に、種類、原因疾患別の病態と生活に及ぼす影響、望ましい対応について授業を行っている。このような医学的知識と同時に、本科目を担当する教員が複数自治体の地域包括ケアや介護人材の育成に携わってきた経歴があることから、国や自治体の政策動向にも明るく、学生は医学的知識以外にも幅広い知識を習得することができると考えられる。特に政策動向は年々発展・変化しており、使用している教科書の内容が授業実施時には古くなっていることもあるため、担当教員側でも積極的に情報収集に努め、研修等にも出ているとのことであった。

特に優れた点

当該校の多くの科目で取り入れているグループワークを本科目でも積極的に取り入れている。本科目では、認知症の基礎知識をもとに、個別事例を使用しながら個々の心身状況や生活歴、家族関係などと併せて考察させながらメンバー同士の意見交換を行っているとのことである。聞き取りをした学生からも、グループワークのディスカッションを通して「原因疾患や症状別の対応方法も大切だが、本人の言いたいことや言えない思いに耳を傾けることが大切だと学んだ」など、自己評価にある「得た知識をどう自分のものにするか」という観点が学生に伝わり、それぞれの学生の介護観の中に根付いていること、そのためにグループワークが効果を発揮していることが確認できた。

さらなる向上を期待する点（改善を要する点も含めて）

他科目にもいえることだが、特に本科目では、医学の進歩や政策動向に合わせてタイムリーな情報や知識を随時提供することの難しさがある。また医学的知識をベースに介護福祉士として能力を発揮するためには、その人らしい日常生活や地域での生活をどう再構築していくかという視点、そのために必要な地域の資源や多職種との連携が必要である。介護福祉士養成校全般に言えることではあるが、政策動向に合わせた知識のアップデートやコミュニティワーク的な視点もまじえた教育が今後求められるであろう。

必須4-②	認知症の特性を踏まえたコミュニケーションの方法を習得させるためにどのような教育を行っていますか。
評定	2
<p>評価する点</p> <p>認知症の理解は、ミクロ的視点からは医学的知識を基盤とした原因疾患別の症状とその対応法を学ぶことが基本になるが、一方でマクロ的視点からは「どんな障害があっても同じ人間であり、その尊厳は不変である」という哲学を併せて理解させることが大切である。コミュニケーション場面においては、両者をバランスよく盛り込むことで利用者は介護職を信頼できるようになる。この過程を自己評価では「介護福祉士のかかわりやまなざし、支援動作の中で自然に伝わってゆくものでありたいと考えている」と表現しているが、学生への聞き取りでは「基礎知識は必要だが、一方で『認知症であってもなくても同じ人間なんだ』という考え方で接することができるようになった」と発言した学生に他の学生もうなずいていたことから、この教育姿勢は学生にも伝わっていることが確認できた。</p>	
<p>特に優れた点</p> <p>「生活支援技術」とは別に、本科目でもコミュニケーションの演習をグループワーク方式で取り入れており、認知症高齢者役の学生、介護福祉士役の学生ともに真剣に役になり切り、双方の感じ方、周囲の観察者の感じ方などをグループで共有し、丁寧に意見交換をさせているとのことである。</p> <p>また、授業で得た知識をただ暗記するのではなく、利用者の状態に合わせて生活像と求められる支援を広く考察させることで、自己評価にある「総合的な思考」ができるようになるものと考えられる。</p> <p>多くの科目でグループワークを取り入れているとのことなので、本科目に限らず他科目でもこのような「介護福祉士としての総合的思考力」が醸成され、就職してもチームの一員として「自律的思考」をし、責任ある発言ができるようになるものと考えられる。</p>	
<p>さらなる向上を期待する点（改善を要する点も含めて）</p> <p>認知症が生活に及ぼす影響は、年齢、社会的立場、家族関係などによって大きく違いが生じる。特に最近では若年性アルツハイマー患者に対する生活支援や就労支援が注目されており、配偶者や子どもにかかる負担は高齢者の認知症とは質を異にする面がある。そういった意味で、「認知症高齢者対介護福祉士」という1対1の関係でなく、介護福祉士による多様な世代、家族環境、就労・就学環境にある家族を視野に入れた支援の在り方まで広げた対応も取り入れていく必要があるだろう。</p>	

必須4-③	個別の心身状況に沿った介護を行うために「生活支援技術」や「介護過程」等の専門科目においてどのようなアプローチ方法を教育していますか。
評定	3
<p>評価する点</p>	

身体介護が中心になりがちな「生活支援技術」でも、利用者を認知症という設定にした
り、認知症高齢者に対する介護の事例を取り入れたりしながら、身体介護技術を展開し
ながら介護時のコミュニケーション技術も高められるよう工夫した授業展開を行ってい
るとのことである。ここで、単なる手先のテクニックの修得だけではなく、個々の心身
状況や個性に応じて応用できる汎用的な技術や能力が培われているようである。ここ
でもグループワークの強みを生かし、教科書的には適切な技術展開であっても、個別性
をもったこの事例の利用者にとってどうだったかといった点まで踏み込んで議論し、共
同思索を通して一定の到達点を見出そうとする教育的な工夫が効果を発揮しているこ
とがわかる。

身体介護と認知症介護などを複合的に行う場合は「こころとからだのしくみ」「障害の理
解」「認知症の理解」などの他の専門科目、これらの知識を統合して個別具体化するた
めに「介護過程」などの科目担当者と連携しながら各科目のシラバスを作っているこ
とで、年度末までに作成されるカリキュラムマップにも、この科目間連携が図式化され
ていた。

特に優れた点

科目間連携については、学科会議、講師会等の資料では各科目の進捗状況や受講する学
生の進捗などが報告し、話し合われている。これらのもとになる上記のカリキュラムマ
ップも、複数回にわたる会議で時間をかけて検討され、複数の科目が相互連携・相互補
完し合いながらカリキュラム全体としてどのような介護福祉士を養成するかという教育
全体の目標に収斂されていくことが一目瞭然である。

学生からの聞き取りでも「どの科目の先生方も一つの目標を持ったチームの一員として
私たちを見てくれている。私たち学生もチームの一員だと思えてくる」「だからどの先生
にも、自分の苦手なことを言いやすいし、だから苦手なものを克服しようと思えてくる」
と話していた。

さらなる向上を期待する点（改善を要する点も含めて）

特になし（会議等でその時々の課題と目標がうたわれ、それをもとに各学生の状況や授
業の進捗状況が話し合われており、科目間連携が効果的に行われていることがわかった）

基準5 介護福祉士養成校の教員の質向上

総評

各教員に週1日の研究日を設け、研修会や学会等への参加に活用させている。また、教
員一人当たり10万円の研修費を予算計上し、研究図書費や研修会、諸学会への参加に充
てている。必要に応じて追加付与も行っている。業務として参加する研修は、週1回行わ
れる学科会議で検討して、各教員が公平にその機会を活用できるようにしている。日本介
護福祉士養成施設協会の全国研修にはほとんどの養成校が参加しているが、当該校のよ
うにほぼ全教員が毎年参加するケースは珍しい。

このように各種研修、学会への積極的な参加を奨励しているほか、外部の研修講師や各種団体の役員依頼も、地域への貢献を教員の資質向上の機会と捉え、積極的に引き受けている。また、新規採用教員は、介護教員講習会を受講しながら1年間学校業務全般に携わったり授業補助に入ったりして、2年目から授業を担当する。

外部で得た新たな知見や情報を学校教育に役立て、教育を受けた卒業生が社会に貢献するという考えのもと、学校内外のあらゆる機会を教員の資質向上、ひいては学校教育の質向上に役立てようとする姿勢が強くなってきた。

ただし、授業や学生指導などの校内業務とのバランス、各教員の負担増に関する調整は、今後ますます必要になってくると考えられる。

必須5-①	教員の研修計画書をどのように作成し推進していますか。
評定	2
<p>評価する点</p> <p>教員1名当たり年間10万円の研修費が計上され、業務を一時的に離れて行ったり、業務として行ったりしている。</p> <p>業務を離れて参加する研修は、担当業務を調整して参加するものや、週1日割り当てられた研究日を活用して参加するものがある。こちらは個人で情報を得て参加するため、研修計画書を提出し、学科会議での審議等を経て決済された上で参加している。研究費は可能な限り付加給付も行っており、教員のモチベーションの維持向上や教科研究の助けとなるよう配慮もされていた。</p> <p>計画書・報告書の綴りを確認すると、介護福祉学科での平成27年度(12月現在)の研修参加計画書は〇件、内訳は〇〇が〇件、〇〇が〇件、〇〇が〇件で、〇〇な特徴があることが分かった。(書類確認必要)</p>	
<p>特に優れた点</p> <p>『研修報告書』は、研修内容のほか個人として役立ったこと、学校教育全般に役立つようなことなど、詳細に記載されていた。参加する教員が、個人の資質向上だけでなく教職員チームの代表としての、学校教育全般の資質向上に役立てようとする意識が見て取れた。</p> <p>また、上述したように新任教員は採用後に介護教員講習会を受講し、その間は教務課に所属して授業の補助や学校業務全般を広く経験した後で授業を担当するという方針は、学校が教員に求める資質、つまりチームの一員としての意識の醸成や教職員としての資質向上を図るための研修期間(OJT)と捉えることができる。訪問調査時は教員、事務職員の別なく多くの教職員が学生の個人名や特徴を把握していた。学生グループとの面談でも「先生方はチームとして私たちを育ててくれている」「学生である私たちもチームの一員である」と言い、全員が同意していたことにこのシステムの効果が表れていると考えられた。</p>	

週 1 回行われる学科会議の議事録を確認すると、個々の学生に関する各教員からの報告、科目の進捗状況とカリキュラム全体との関連等について詳細に話し合われており、各種の情報を共有しながらチームとして教育の質の向上を高め、個々の教員が互いに課題を共有・補完し合いながら資質を高めようとしていることが確認できた。

さらなる向上を期待する点（改善を要する点も含めて）

各教員に研究日が設定されているものの、諸業務により出勤しなければならないことが多く、十分に研究・研修に充てられない状況である。

さまざまな取り組みによる学校全体でのチームの一員としての意識の醸成は、教員同士の連携強化と学生の介護福祉士としての資質向上や豊かな人間性の向上に大いに役立っているが、週 1 回の学科会議は時間割の関係から授業時間終了後の 18:00 からしか開催できず、長時間に亘ることも多いとのことである。正規時間内で開催できるよう配慮したいが困難な状況にあり、これは今後改善が求められる点である。

必須 5 - ②	介養協の研修会、関連学会、職能団体の研修会へ参加しやすくするためにどのような体制をとっていますか。
評価	3

評価する点

業務として行う研修のうち、介養協が定期的で開催するものは、週 1 回の学科会議の中で担当者を決めて任命している。年間予定を立てて全教員が公平に研修に参加できるようにしている。年 1 回行われる日本介護福祉士養成施設協会主催の全国教職員研修には学校教職員だけでなく法人理事等も含めて参加している。全国研修は全教員を始め、事務職員や校長、法人理事を含めて毎年多数参加し、介護福祉士養成教育の動向、他校との連絡調整や親睦に役立っている。

国立市や東京都が実施する研修への参加のほか、地域貢献のため東京都や東京都社会福祉協議会が企画する市民・現任者向けの研修に講師として招聘される場合も、情報収集や教育実践能力を高めるための広い意味での研修機会と捉え、積極的に関与するようにしている。

関連学会や職能団体の研修会は、個人が研究日や勤務時間外に参加しているが、特に職能団体（日本介護福祉士会）の研修や行事には積極的に参加し、企画運営スタッフとして関与している教員もいる。関連学会では、校内にとどまらず他校教員との共同研究を日本介護福祉学会等に参加して、日ごろの教育・研究成果を発表している。

これらの研修会・学会等への参加で得られた知見や情報は、「研修報告書」に詳細にまとめられ、週 1 回の学科会議で報告・共有されている。

このように、さまざまな場を広く教員の資質向上のための研修の場と捉え、業務内・業務外を問わず学校全体で奨励していることがうかがわれた。

特に優れた点

職能団体（日本介護福祉士会）へは、卒業後初年度の入会金・年会費を学費の中から負担し、全員が会員となるよう奨励しているため、教員も積極的に研修に参加しており、研修や行事の企画運営スタッフとして関与する機会も多い。このことは、教育を在学中の2年間で完結させるのではなく、介護福祉専門職としての将来像を見据えた長期的視点に立つ教育を実践するという学校の姿勢の現れであり、高く評価すべき点である。

さらなる向上を期待する点（改善を要する点も含めて）

前項と同様に、研修等に参加して自らの資質を向上させることと、学生指導や実習巡回など現に直面する課題・問題への対応を両立させることが難しくなっている。これは他の多くの学校に共通する問題ではあるが、年々増加する教員の負担の軽減、適切な人員配置や科目配分、勤務時間内での効率化に対する取り組みが求められる。

必須5-③	介護福祉士養成校の教員の資質向上のために、特色ある独自の取り組みとして、どのようなことを行っていますか。
評定	2

評価する点

前項に挙げたとおり、教員対象の研修会に参加するだけでなく、広く地域に目を向け、市民・都民や現任者向けの研修講師の依頼を積極的に受けることで、これらも広く教員の資質向上の機会と位置づけている。

近隣社会福祉法人や社会福祉協議会の理事や役員、民生委員選出委員、国家試験実施に当たっての委員等の役員を引き受けている教員もいるほか、校長は日本介護福祉士養成施設協会の総務副委員長や関東甲信越ブロック東京部会の議長を務めている。多くの教職員がそれぞれの立場で地域や職能団体、行政と関わりをもち、地域や現場のニーズを肌で感じ取ったり各種動向を把握したりすることで、科目教育を始めとする学校業務だけではなく、学校教育が将来の地域福祉に貢献するための教育を改めて見直す機会としている。

特に優れた点

外部に出て学んだり講師や役員を務めることが、地域に貢献するだけでなく学校教育の質向上に役立て、そのような教育を受けた学生が専門職として社会に貢献するという循環を念頭に置いて取り組まれていることが、聞き取りの端々に現れていた。これらの取り組みはシステムとして構築されたものではないが、校長、事務長からの聞き取り、学科会議や非常勤講師らを招いて行われる講師会の議事録のところどころに記載されており、当該校の教育理念として教職員にしっかり根づいていることが確認できた。

さらなる向上を期待する点（改善を要する点も含めて）

他項と同様に、このような積極的な取り組みが個々の教員への過度の負担になったり、授業や学生指導などの校内業務とバランスをとることが年々難しくなっていることが改善課題である。

基準6 介護福祉士の生きがい・やりがい・キャリア形成等を醸成する教育

総評

介護福祉士として就職し、長く働き続けるために必要な教育や個別指導を、入学前・在校中にわたって授業内外のさまざまな場面で展開しており、学生からの聞き取りでは、教わった内容だけでなく、その指導の意図まで学生に意識され、根づいている様子が見えられた。

施設長や管理者、起業した者、教育職などさまざまな場で活躍する卒業生の講話、ジョブカフェや模擬面接などを通して外部施設の空気に触れ、意欲を高めるための取り組みなど規模の小さな学校ながら多彩な取り組みを行っており、それが学生の意識や卒業後の進路選択（ほぼ全員が介護福祉士として現場に就職）に現れている。

また、介護福祉士として働き続ける上で悩みの種となりやすいチームケアにおける人間関係や多職種との連携については、グループワークでの意見交換や共同作業を通じてコミュニケーション力や実践力を高めることが、専門職としての自覚形成に役立っている。

入学前から一貫して「現場で働く専門職人材の養成」を伝え続け、これを在校中のさまざまな場で具体化し、それが就職率や卒業生の就労継続や多様な場での活躍という一定の成果につながっていると考えられる。

必須6-①	資格取得後のキャリア形成について、どのように授業に取り入れていますか。
評定	2
<p>評価する点</p> <p>介護職員のキャリア形成は、職位や職能の向上という側面とワークライフバランスという側面から考える必要がある。職位や職能の向上では、日本介護福祉士会のファーストステップ研修や内閣府のキャリア段位制度などを紹介し、専門職としてのスキルアップのための自己研鑽の必要性を伝えている。（訪問時未確認）</p> <p>多くの学生が抱える将来への不安は、収入や昇給などの経済的な面と、仕事と家庭生活との両立の面である。当該校では、単に知識や技術の伝達だけではなく、学生自身の介護福祉士としての将来像を描きやすくするため、授業に卒業生を招いて現在の仕事や私生活とのバランスなどについて語ってもらう機会を多く設けている。新人、中堅、一般職員、主任職など卒業生はさまざまな立場で働いており、自らも将来を模索しながら現在の仕事に打ち込むキャリア形成の途上にある。学生はそのような「生の声」を聞くことで、自らが個人及び専門職として今から何にどう取り組んでいけば良いかを考え始めるようになるという。</p> <p>キャリア形成の第一歩とも言える就職活動では、学生は「選んでもらう」と考えがちだが、授業内外でのこれらの取り組みを通して学生には「自ら就職先を選ぶ、人生を選び</p>	

取る」という意識が芽生える。また内定の出た学生を発表することで、個々の学生のモチベーションや意欲の向上に役立っている。

特に優れた点

卒業生を招いての講話だけではなく、外部施設の話を開いたり実際に模擬面接を受けたりすることで、学生は現場の生の空気を感じ取ることができる。

キャリア形成とは、行政や団体が用意したものに乗るということではなく、学生が自分自身と向かい合い、自己研鑽して資質向上させることであるという学校の考えが、授業以外のこのような取り組みにも表れていると評価することができる。

さらなる向上を期待する点（改善を要する点も含めて）

特になし

必須6-②	キャリア形成のしくみを理解させるために、どのような取り組みをしていますか。
評定	3
<p>評価する点</p> <p>授業では、日本介護福祉士会のファーストステップ研修や、現在モデル事業を実施している認定介護福祉士制度などのキャリアアップの仕組み、日本介護福祉士養成施設協会が検討している管理介護福祉士や、すでに運用されている内閣府のキャリア段位制度などを紹介している。介護福祉士の上級資格として介護支援専門員（ケアマネジャー）を考えるケースがあるが、これは他職種であり、介護の専門職として着実にスキルアップし、組織内で中堅から指導的立場にさらには管理的立場に立ち、後進を育成することが国家資格取得者として重要であることを強調している。</p> <p>また、介護福祉士は医療職を始めとする多職種と比べて下位と認識されることが多く、これが卒業後に現場での悩みや介護福祉士として働き続けることへの迷いにつながることも多いという。これを考慮して、授業では「介護福祉士は利用者に寄り添い、その思いを代弁し、他職種と連携しながら日常生活を幅広く観察して多岐に亘る支援を提供する専門職である」という自覚を根づかせ、他職種とは上下関係でなく対等な立場であることを介護福祉士である教員、看護師資格をもつ教員などから繰り返し伝えるよう心掛けていたとのことである。</p> <p>一言でキャリアアップと言っても、多様な高度技術の修得（スキルアップ）、組織内での昇任、上級資格の取得、指導者・教育者としての道など、その道筋は多様である。卒業生を授業に招いての講話でもその点を考慮して、主任や施設長になっている者、起業した者、上級資格を取った者、教育者となった者（現に当該校の教員の半数は卒業生である）など、さまざまな立場の者を招き、学生が将来選択や働き方、暮らし方を考え、選択肢を広げる場としている。</p>	

特に優れた点

卒業生の講話は多くの学校で実施しているが、学生からの聞き取りでこの件について話題に出た際、「介護福祉士としての働き方や暮らし方は自分が考えていたよりずっと広い」といった発言が出て、他の学生も大きく同意していた。現に当該校の卒業生は、施設長クラスや起業した者のほか、職能団体の理事、教育者など多岐に亘って活躍しており、そのような人たちが母校で話をする中で、キャリア形成は与えられるものでなく自ら作り出すものなのだということが在校生にしっかりと伝わっていることが確認できた。何よりも介護福祉士としての専門性や専門職としての誇りを持ち続けることが重要であり、これを授業内外で伝える姿勢が高く評価できる。

これらは独自の取り組みやシステム化された取り組みではないが、さまざまな場面で内実の伴う教育が行われている点を高く評価したい。

さらなる向上を期待する点（改善を要する点も含めて）

特になし

6-④	就職への自覚や意欲を持たせる教育をどのように行っていますか
評定	2
評価する点	<p>オープンキャンパスや高校でのガイダンスなど、入学前から当該校は「現場で活躍する人材を養成する場である」ことを強調しており、入学後も日常の学生指導を通してその意識を確認している。</p> <p>学生からの聞き取りでも、「入学前から言われたことで、漠然としていた介護福祉士のイメージがはっきりした」「実習などで落ち込んだ時も、先生がじっくり話を聞いてくれたことで視野が広がり、モチベーションを維持できた」という発言があった。実習での失敗や悩みを通して現場に就職することをためらう学生は多い。しかし聞き取りでは、教職員によるきめ細やかな声かけや指導のほか、多くの授業で取り入れているグループワークを通してコミュニケーション能力が高まり、多様な意見を取り入れながら自らの考え方や将来のイメージを固めていくことができたという学生もいた。</p> <p>介護職は人手不足により売り手市場であるが、個々の資質や考え方、働き方に応じて自分に合う理念や体制を備えた法人・事業所を選んで就職してほしいという意図から、複数の法人の採用担当者を招いて説明を受ける「ジョブカフェ」を年2回開催している。</p> <p>また就職に向けて「模擬面接」を行っているが、これは施設長や管理職クラスの方に実際に面接官になってもらい、全学生の前で面接を受けるというものである。</p> <p>内定が出た学生名を本人の承諾のもとで壁に張り出し、学生どうしが士気を高めることに役立っている。さらに、多くの学生が就職する多摩地区にはOB・OG職員が多くいて、卒業後も同窓生どうしの横のつながりの中で情報交換したり自己研鑽し合ったりしているとのことである。</p>

特に優れた点

先述の卒業生講話やキャリア形成を意識した授業に加え、上記のような就職に向けた行事、きめ細やかな学生指導が連動して、学生自身の中に介護現場で悩みながらも前進するイメージ、就職に向けた意欲が醸成されていくことが確認できた。

さらなる向上を期待する点（改善を要する点も含めて）

特になし

基準7 介護福祉士の実習における実習先との連携

総評

実習期間を1年時には実習Ⅰとして3回、2年時に実習Ⅱとして2回実施している。実習Ⅰは1年時6月に1週間、11月に2週間、12月に2週間。実習Ⅱは、2年時9月に3週間、10月に3週間、合計11週間の実習が組み立てられている。各実習は、学校独自で作成している「カリキュラムマップ」において講義科目との連動性が示されており、そのことで学生、教員、実習指導者がその関連性をわかりやすく、見やすくしている。そのことで、学習の主体者である学生たちは、どの時点で何を学ぶかが明確になっている。またそのことは、実習の目標達成に効果ある取り組みとしての成果に貢献しているといえる。

2年時に長期の実習を3週間組んでおり、基本的にはその実習先を同じにすることで、介護過程の展開の一連の流れを学生が修得しやすく工夫されている。また、長期の実習に参加する学生たちの個別の支援を、メール等を活用しタイムリーに実施できていることは、学生が実習を円滑に進めることへの教員の努力の成果であるともいえる。

実習施設の見直しを適宜行い、学生が実習で学ぶ環境づくりにも努力している。また、実習施設の情報収集には、卒業生や教員の学外活動を効果的に生かしていることは、学生を支えるのは教員だけでなく、卒業生も関与しているという点で評価できる。またそのことは、多摩地区での学校運営の特色を生かし、多くの卒業生が実習先で、学生を支援していることが、インタビューで確認できた。さらに、実習前後で実施される介護総合演習には、卒業生を招くなどの工夫をしており、施設と学校の連携を強化する取り組みがされている。

必須7—① 実習に向けて事前準備と実習後のフィードバックを、どのように行っていますか。

評定 3

評価する点

介護実習において、記録は学生たちにとって必要性は高いが、苦手な学びである。しかし、介護総合演習の中で、この苦手意識をなくし、段階的に指導を行っている。学生の実習記録を確認する中で、この段階的指導が生かされていることを目視できた。また、

このことは「カリキュラムマップ」を確認することでも評価できた。これらの事から、学生が自分の記録を確認することで、自分の記録技術が向上してゆくことを実感でき、自信に繋がるポートフォリオとして活用できるものになっている。

実習前にオリエンテーションを実施することで、実習先まで交通手段、実習先での準備に戸惑わないような細かな配慮がなされている。この事で、学生は実習先での不安解消に繋がっている。また、昨今の学生たちの特徴でもある生活習慣の不足を解消させることに繋がり、本来の実習目標を効果的に行うための、精神的支援にも繋がっている。

特に優れた点

法で規定されている週 1 回の巡回実習指導に加え、必要に応じて携帯電話、メールを活用している。学生たちにとっての細やかな支援が行われている。このことは、現在の学生を良く知り、その特性を生かした実習支援に繋がっていると評価できる。また、ここで得た情報を、実習指導者との連携にも生かしていることも評価できる。タイムリーな指導を、メール等を活用する方法は、現在の学生事情に即しているともいえる。

実習Ⅱでの成果を、卒業研究発表会に向けて、論文作成、発表 P P 作成の指導を実践しており、そこに指導者を招くことで、学生たちの成長を確認する時間を作っている。このことは、学内授業の成果と実習の連携を指導者に伝える良い機会となっている。

更なる向上を期待する点（改善を要する点も含めて）

特にすぐれた点であることで挙げた内容は、学生たちにとっては効果的であるが、一定の基準を設けないと、教員の負担感はないだろうか。負担感の感じ方は各々異なると思うが、この点に関しての教員間の負担感の聞き取りをしてみてもはどうだろうかと考える。その上で、更なる効果的な対応を考えるだけの力量がある学校になると感じる。

必須 7—② 実習巡回時に指導者と十分なカンファレンス時間を取るためにどのような働きかけをしていますか。

評定 2

評価する点

学校と実習指導者との連携の在り方は、実習巡回指導記録から確認することができた。週 1 回の巡回訪問指導が徹底されており、その記録物の管理も確実に行われていた。その記録物には、必ず実習指導者と担当教員がカンファレンスを行っているからこそ、表現される内容が含まれていた。学校が教員に対して、実習指導者との連携に力を注ぐように徹底していることは、「YMCA の職員はうるさいけれど本気だ」という指導者からの感想の表れであると推測できた。また、学生のインタビューにおいて、実習指導者と教員の連携が、実習を効果的に支援しているということが確認できた。

特に優れた点

実習指導者から学校への連絡があった場合には、連携を深めるための重要項目として、施設を訪問し、状況確認を行っている。連携に、指導者、教員が見える関係で問題解決

に向かうことは重要な事である。多施設を訪問する事の必要な巡回指導時においても、問題解決を先送りにしない姿勢が伺われる。そのことは、実習生の教育のための実習という視点があるからであり、そのための連携における、一番の解決策を実践しているといえる。

更なる向上を期待する点（改善を要する点も含めて）

問題が生じた場合のカンファレンスの持ち方や、その記録物を生かし、そのことを題材にした研究に取り組むことのできる力のある学校であると考察する。研究成果を発表することで、他校の模範になるのではないか。

必須7—③ 実習先との連携のための特色ある独自の取り組みとしてどのような事を行っていますか

評定 3

評価する点

実習施設の見直しを行っていること。実習施設の見直しは、実習指導者の配置基準や他の要件確認などが必要なものである。一度依頼すれば、継続的に依頼しているのが多い状況の中で、指導者が変われば環境が変化するという視点のもと、学生の学ぶ環境整備のための見直しを行っていることは評価できる。さらに、そのために実際に教員が東京都のキャリアアップ支援事業を活用し、施設職員研修講師をうけるという実践を通して行われている。実習には実習指導者だけでなく、施設職員の様子を知ることも重要であるという視点をもって実習を考えているという事は評価できる。

特に優れた点

学生の個別性を考え、実習がうまくいかなかったから、成長が認められないとは考えていないという視点を持っている。しかし、この点は実習指導者には理解しにくい点でもあるので、その点を配慮できる環境整備を学校が主体となって実践している。また、そのために卒業生の力を活用していることや、多摩地区に根差した教育施設であることの歴史からも評価できる。

更なる向上を期待する点（改善を要する点も含めて）

施設内研修講師を実践して得た情報を、施設との関係性を保ちながら、フィードバックする体制を構築することができれば、施設の質向上に寄与できるのではないか。そのことが引いては実習指導環境の質向上に寄与できるのではないか。

基準8 介護福祉士の専門的力量的の向上

総評

介護福祉士にとって必要な専門的力量的とは何かという点を、学校が言語化できている。その趣旨では、介護福祉士の専門的力量的は、学校教育だけでは完結するものではなく、現場で利用者及びその家族との関わり、多職種との関わりが必要であることを想定して

いる。そこで、学内授業では、「多様な背景を持つグループメンバーによるグループワーク手法による学習形態」を実践している。状況を良く確認し、何が介護福祉士に必要なのかを熟慮した学習形態であるといえる。さらにグループワーク自体は、以前から多くの学習に取り入れられているものではあるが、目的・目標を明確にしていることから、ぶれることのない実践がうかがわれた。このことは、学生インタビューにおいて、一人ひとりが自分の考えや体験から、介護を語ることができていることから確認できた。学習活動の効果を、評価者自信が体験できる機会となった。

必須 8—① 卒業生も自己研鑽し継続的な学習に取り組む意欲を持ち続けるために在学中にどのような教育をおこなっていますか。

評定 3

評価する点

他項目と関連することではあるが、卒業時に職能団体である「日本介護福祉士会」に卒業生全員が入会しているという点は、在学中の指導の現われであると評価できる。このことは、つまずきやすい自己研鑽の場探しを容易にし、専門職同士が継続的に学び続けるための評価できる点である。入会するためのこの方法論は、他校にもその取り組み方法を伝えてもらいたい点である。

卒業後ホームカミングデイが企画されており、そこでは、卒業生同士が交流することで、勉強会の実施や、教員による研修会が実施されるなど、多様な取り組みがされている。卒業生同士が、年次を超えお互いが交わることは、悩みの解決、将来像の確立に繋がっている。卒業後ホームカミングデイを実施する学校は多くあるが、校友会活動が活発である結果として学内補修のために 400 万円の寄付がなされたことは評価される。

特に優れた点

評価する点と同様になるが、校友会活動が活発に行われている。その結果は開学 20 周年後、学内補修のため 400 万円の寄付があったこと、さらにはその残額を学生たちの奨学金として寄付し、在校生をささえる卒業生の姿を評価することができる。

更なる向上を期待する点（改善を要する点も含めて）

フェイスブックを立ち上げているということであるが、更新を定期的に行うことで、タイムリーに介護福祉士の活動を支えることに繋がるのではないかな。

選択 8—② 離職防止を図るために卒業生等に対してどのような相談援助体制を整えていますか。

評定 3

評価する点

就職及び転職相談を学生時代から随時実施している。特に卒業生に対して、教務カウ

ターに卒業生ノートを準備している。直近 906 日で 281 名（3 日に 1 人程度）であり、校友会活動の効果が実感できる。このことは、離職防止のための機会に繋がることと評価できる。

特に優れた点

教務カウンターに置く卒業生ノートの記述から、現場の介護福祉士が何に悩んでいるのか、どのような状態であるのか、教員が学生の卒業後の状況を加味しながら確認する資料となっている。このことは、学校規模と卒業整数との関係でも多い事が予測できる。

「学習支援演習」の実践などで、卒業後の社会的観点の育成等を視野に入れて教育されている。学生の学びの中に卒業生を入れることで、リアルな介護福祉士現場を知る機会を作り、そのことが離職防止に繋がっていると評価できる。

更なる向上を期待する点（改善を要する点も含めて）

特になし。

選択 8-⑥ 介護福祉士の専門的力量的向上のために特色ある独自の取り組みとしてどのような事をおこなっていますか。

評価 2

評価する点

他項目と関連することではあるが、卒業時に職能団体である「日本介護福祉士会」に卒業生全員が入会しているという点は、在学中の指導の現われであると評価できる。

また、これも他項目と関連する項目であるが、校友会活動が活発に行われていることは、他校に比べても優れている点であることとして、評価できる。

特に優れた点

他項目とも関係するが、「カリキュラムマップ」が準備されていることで、介護福祉士としての基礎教育内容が確立しており、学生が履修内容を確認できるようになっている。このことは、介護福祉士の専門性とは何かを、2年間の就学期間において学ぶことから、その専門性を問える能力を修得しているといえる。また、その力を、東京都介護福祉士会における活動につなげていることは評価でき、優れた点であるといえる。

更なる向上を期待する点（改善を要する点も含めて）

地域性の強い学校ではあるが、独自の取り組みも多く実践している。そして、関連する団体以外にも広く広報することで、介護の力を理解してもらえる活動につなげているものと思われる。

平成 27 年度文部科学省委託事業
「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進事業」
「職業実践専門課程の各認定要件等に関する先進的取り組みの推進」

介護福祉士に特化した第三者評価項目に基づく
各養成施設への評価実施とその成果実証

成果報告書

平成 28 年 3 月 1 日印刷
学校法人敬心学園 日本福祉教育専門学校
〒171-0033 東京都豊島区高田 3-6-15
TEL. 03-3982-2511